

Arch(超高速開発支援サービス)

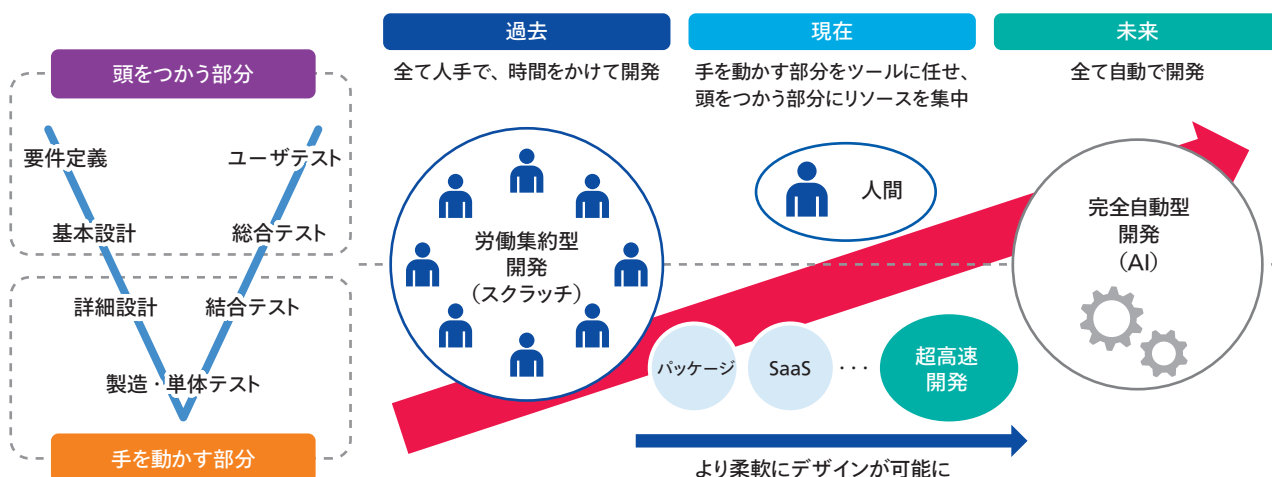
～システム開発をクイックに実現～

「完成までに時間がかかりすぎ顧客のニーズ・市場の環境が既に変化している」「早期に競合と差別化を図りたいのに完成する頃には競合も同じことをやっている」「期待した効果が得られず投資を十分に回収できない」といったIT開発者が抱える課題を解決する手法として、「超高速開発」が脚光を浴び始めています。

アビームコンサルティングは、長年システム開発の現場で培った方法論をもとに、超高速開発手法の適用範囲や方針の検討、ツールの選定までのトータルなアセスメントサービスや、システム開発サービスをArch (ABeam RAD Solution for Game Change)として集約し、従来の考え方や手法を越え時代に合ったクイックなシステム開発の実現を支援します。

システム開発の変遷

従来は頭を使う部分(要件定義～基本設計)、手を動かす部分(詳細設計～結合テスト)ともに労働集約で行っていました。現在は手を動かす部分をツールに任せ、人間は頭を使う部分に集中するモデルがトレンドです。その中でもより柔軟に自社のビジネスに合わせてデザインできるソリューションとして、超高速開発が目立っています。



超高速開発とは

超高速開発とは、業務のデザインからテスト、稼働後の運用・保守作業を含めたシステム全般のライフサイクルに渡る作業について、高い品質を維持しながらも高い生産性を生み出す手法で、要件定義を円滑に実施することが可能です。また、スピードや品質だけでなくコストの面でも貢献します。

ユーザの要件確定までの期間を短縮

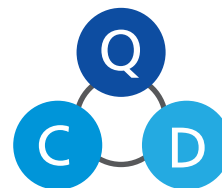
動くモノ(画面等)を先につくり、モノを見ながら要件を詰めていくことができるため、イメージがしやすく、要件確定までの期間の短縮が図れる。



QCD 全てに貢献

【Qualityに貢献する理由】

- ・リポジトリでの一元管理により、整合性の確保をツールが支援
- ・設計情報をツール上で確認可能なため、仕様が可視化され、ドキュメントとソースが乖離しない



【Costに貢献する理由】

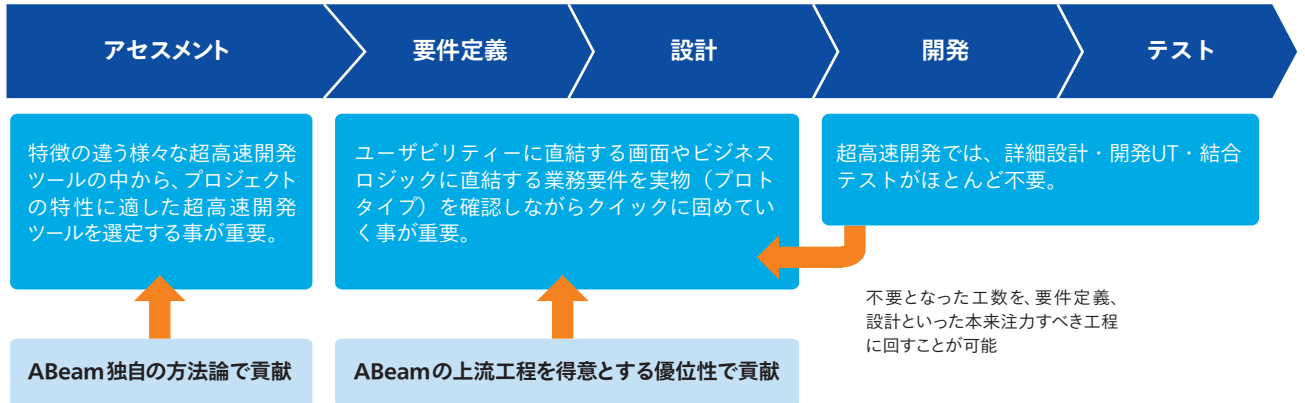
- ・ツールによる開発自動化で工数・保守費削減
- ・コードを書くことなく、GUI操作で開発が行えるため、短期間で技術者育成ができ、内製化の促進が可能

【Deliveryに貢献する理由】

- ・詳細設計～結合テストにあたる部分をツールが担うため、その作業分の工期短縮が可能

アビームが考える超高速開発

開発以降のシステム構築作業を自動化するとともに、上流工程に知見を有するアビームが支援することで、本来注力すべき要件定義や設計に力を入れることができます。また、アセスメントにおいてもアビーム独自の的方法論を用い支援します。



アビームが提供するサービス

アセスメントサービス

- ✓ ABeamの経験・知見を集積して開発した独自のアセスメント方法論を使用
- ✓ 貴社プロジェクトの特性を調査・分析し、最適な超高速開発ツールを選定

ツール選定
超高速開発ツールとして公表されている多様な製品から選定を開始。
UI特化型 (UI特化型) | PG支援型 (PG支援型) | BL特化型 (BL特化型)

数十の様々なツールから選定開始

評価シート
各項目のチェックボックスと評価欄を有する評価シート。各項目のチェックボックスと評価欄を有する評価シート。

評価シートを活用して、ツールを評価・決定

効果測定 - スケッチ開発との工数比較 -
詳細設計、開発・単体テストの工数は、スケッチ開発と比較して、約8割減少 (約8割減少)

項目	詳細設計	開発	単体テスト	スケッチ開発	削減率
UIロジック (画面・帳票)	XX	XX	XX	XX	XX
ビジネスロジック	XX	XX	XX	XX	XX
データ連携ロジック					
UIロジック (画面・帳票)	XX	XX	XX	XX	XX
ビジネスロジック					
データ連携ロジック					

選定したツールを使用した場合の効果測定

システム構築サービス

- ✓ アビームの上流工程への知見と、実物を確認しながら上流工程を進めていくことができる「超高速開発の優位性」を掛け合わせ、ユーザビリティが高く品質の高いシステムをクイックに構築
- ✓ アビーム独自の開発方法論を使用 (超高速開発の特長を活かすためにアビームが長年蓄積してきた方法論をアレンジ)

要件定義
基本設計

業務フロー・ルール等の要件を整理・要件から機能仕様を整理

開発ツール画面

整理した要件、仕様をツールに入力し、実物を確認しながら進める

開発進捗表

項目	進捗状況	備考
要件定義	完了	
基本設計	完了	
開発	完了	
テスト	完了	

ABeam独自の開発方法論で超高速開発の特長を活かして推進